

萬葉集講話 (三)

多田雄三

大宇宙の大中心としての事實と真理、仏徒の所云、事と理、事理不二。これを觀自在身と呼ぶことができる。

觀自在身といふのは、大悟徹底の身で、解説身であるから、古人はこれを、白玉とも白玉楼ともいって、支那文字では、皇と書いてある。皇は白玉の合成で、水精宮の義である。また、国とも書く。口と玉との合成で、白玉楼閣の義である。宇内の意で、築成建國を教へてゐる。□は宇宙で、經と緯とで、經は緯で緯は經であるところの極大極小なると共に、經のあるのは緯のあるので緯のあるのは經のあるので、つまり、宇宙で、宇宙とは經緯であるから、簡

體で、各類で、各界で、大小長短明闇美醜正邪曲直と千様萬態なのである。其の千様萬態であるところの宇宙を、明瞭瞭に照觀し得るところの簡體であるとの意味で、□の中に玉を置いたのである。白玉楼閣であるから、淨土なので、白玉土なりて、高き處に、二天門である。これを觀自在身と呼ぶ。觀自在菩薩といふに等しいのである。

日本民族の傳へて、文天言三の「ナホビ」に、この觀自在菩薩といふ名は相當するので大宇宙の大中心といふ義になるのである。

大宇宙の大中心といふのは、簡體無き簡體といふ義なので、無宇宙の宇宙なので極大極小なので、一音響で一圓相なので、世界無き世界、人無きの人なのである。

人無きの人は、其の實體を命と呼び、其の妙用を尊と稱するので、支那文字

を借りて二様に表現したので、日本語のみならば、「アメノミオヤ」が命で、「ミコト」は尊の字を用ゐたのに當るのである。

それは丁度、仏の語が「アメノミオヤ」に當るのに對して、觀世音菩薩の義が「ミコト」に當ると等しき關係である。

それだから、仏とは大宇宙で、觀世音菩薩とは大宇宙の大中心としての宇宙であるところの觀自在身である。

その觀自在身であるところの「ナホビ」といふのは、事實と眞理との不二一體である「アメノミオヤ」の妙用であるから、二重相で一圓相で體と用との不二であるところの事と理との不二不二三で、すなはち、梵音で、海潮音で妙音觀世音で、一音響である。

日本民族の傳へて來た言靈の、「ナホビ」に、この觀自在菩薩といふ名は相當するので大宇宙の大中心といふ義になるのである。

大宇宙の大中心といふのは、箇體無き箇體といふ義なので、無宇宙の宇宙なので極大極小なので、一音響で一圓相なので、世界無き世界、人無きの人なのである。

人無きの人は、其の實體を命と呼び、其の妙用を尊みことと称するので、支那文字を借りて二

様に表現したので、日本語のみ

ならば、「アメノミオヤ」が命

で、「ミコト」は尊みことの字を用ゐ

たのに當るのである。

それは丁度、佛の語が「アメノミオヤ」に當るのに對して、觀世音菩薩の義が「ミコト」に當ると等しき關係である。

それだから、佛とは大宇宙で、觀世音菩薩とは大宇宙の大中心としての宇宙であるところの觀自在身である。

その觀自在身であるところの「ナホビ」といふのは、事實と眞理との不二一體である「アメノミオヤ」の妙用であるから、二重相で一圓相で體と用との不二であるところの事と理との不二不二三で、すなはち、梵音で、海潮音で妙音觀世音で、一音響である。

五蘊（物理次元の存在）も、元を正せば、皆空である。^{みなくう}

神道の用語で言えば、^ひ零の範疇に属した人々乃類である。

ここで言う「空」は「中心無きもの」で

「（いまだ）宇宙を染めざるもの」であって、箇付ではない。

神道の用語では、これを実体としては「空零」と呼び

形容詞としては「異霊奇怪」などと称する。

そのため、空零はいばしは^{クニヒ}奇霊とも呼ばれるが、

特定の中に正しくまっとうならば

^{ナホヒ}それは直霊と呼ばれる。

→人間で言えば、^{ナホヒ}直日の統率の下に、

^{クニミタマ}奇身魂と^{サキミタマ}幸身魂（^{カミ}神と化りたるマカツビ）を形成する。

（拙稿「ナホビの妙用」を参照）

念彼觀音力の原理

現身成仏した暁



人間身としての

觀自在菩薩

という

大宇宙に帰入する↓悟証の身↓地蔵菩薩↓衆生済度の大徳として↓妙音觀世音

↓阿弥陀佛の応化身として↓觀世音佛という↓人間身の意味で觀世音菩薩という



大宇宙 || 佛 || 本体 || 不生不滅

一圓一音の佛界一入は神界

念彼觀音力

稱名 (神言霊)

是故須常念
(このゆえにすべらく
常に念ずべし)

(人間身としての働き)
五つの音
妙音、觀世音、梵音
海潮音、勝彼世間音
を奉称し、感得に努め
ようとする意識

「中心」と「大中心」について

大宇宙の大中心

極大極小、極無極、^{ナホヒ}直靈、ヒ

人無きの人（筒体を成さぬ実体）としては ^(三)

本体 アメノミオヤ（命）、佛

作用 ミコト（尊）、觀世音菩薩

→一円相・一音響（海潮音、梵音、妙音觀世音）

宇宙（筒体）の中心

最大最小、^{ナホヒ}直日、タノフ、根本魂

^{ナホヒ}

最小 ^(四)

オホナホヒ

最大

カムナホヒ

最大最小不二不一

→「大宇宙の大中心としての筒体」

「^{ナホヒ}直日」と悟證した人間身と「^{カミナホヒ}神直日」となる。

表から觀ると一圓晃耀の○ → ^{とよみめ}豊斟渟

裏から觀ると中心歸一したる統一體 → 國狹植

表裏から觀ると永遠不滅の生命一つの個體 ^{くにまから}とい

止まていとこの意 → 國常立 ^{くにとこたち}と呼ぶ。

「千様万態である宇宙を明瞭に照觀（つまり「觀世」）

し得るところの筒体」を称して、觀自在身ないしは觀自在菩

薩と云う。

→解脱身、白玉、皇 とも、また境地としては

白玉樓閣、淨土、皇土、高天原、天国 などとも云う。

（以上「万葉集講話（一～四）みそぎ誌12号～14号より」）

空也上人立像・六波羅密寺



「㊦の音」が神言靈として作用する論理

アミダーバ（サンスクリット）無量光明

アンミンダム（ヨガ・マントラ）光明

アミダブウ

ナーム・アミダブウ

ナムアミダブツ

南無阿彌陀佛

妙音天鼓（アミダブウ）

統一魂（ミスマルミタマ）と称へる

五身魂のこゝと

数理（二）

黄金色

未来五号

五身魂のこゝと

未来五号

「南無阿弥陀佛」とは、阿弥陀国に帰依し奉るとも解されると共に、その極楽浄土の「主」である阿弥陀如来を現身成佛又は即身成佛の為に我が身に呼び寄せる「呼称」となっているのである。

「稱名」とは、「佛体」であり、「妙相」であり、「妙用」であり、「觀世音」という。

「稱名」を一心專念に稱れば、即時に「妙音」となり、「觀世音」となり、この身このまま「觀世音佛」なる「極樂世界」となる。

この身このまま佛の国である極樂世界であると悟る時は、この身このまま極樂淨土である。

もし、人が苦悩あると思つた時は、それは魔界にあるが、一心專念に「稱名」を稱れば、直ちに佛の国である極樂世界となるというところが、これが解脱であり、大死であり、涅槃であり、「一切の有で一切の無」で、「極大にして極小であり、極無極の人」ということになるのである。

父母乃祖乃宗諸有身魂。

發得菩提妙音吉祥。

妙法蓮華經普門品。

衆生若有受諸苦惱一心稱名觀世音即
時觀其音聲即得解脫。ベキナリ

念彼觀音力妙音觀世音 後音 海潮音

具一切功德慈眼視衆生福聚海無量無
數觀世音佛。

父母乃祖乃宗諸有身魂城。

父母乃祖乃宗諸有身魂城。

①とぶとりのあすかのみやはか
みながらかみのとこみやかみし
らすなり。

②人の心いくへに重ねいくへに
かただてやすらんここにかしこ
に。

③之れを日神の神言霊となす。

④□にして日にして二にして一
にして一にあらず二にあらずし
て◎にして◎にして人なり。

⑤人とは十にして田にして田に
して田にして◎にしてヒフミヨ
イムナヤコトにして十種にして
一種にしてヒトなり。

⑥之れを八とも八とも八とも描

きたるは支那民族の伝承したる
ところにして四象にして両儀に
して大極にして小極にして易に
して日月にして柢にして墓にし
て佛にして弗にして非にして否
にして靈にして雨フツ巫にして慈
雨にして零にして○にして無に
して無にあらずして有にして有
にあらずして人にして人にあら
ずして印度人はアミダブーと傳
へ来れるなり。

⑦日神の神言霊を称へつつあれ
ば人の身ながら神の身となるべ
きなり。

⑧其の故は神の言霊が人の身を
導きて神界を築かしむるが為に
して人としての神と成らしむる
なり。

本文は ①-②-③-⑦-⑧

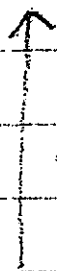
④は③の「日神」の説明文

⑤は④の末尾の「人」の説明文

⑥は、その内容のさらになる説明文

(ここで言う「ヒト」は「人間身」のことではな
い)

⑦ 神の身 = ⑧ 人としての神 = ⑤ 「ヒ



← 日神の神霊

① 人の身 (人間身)

其の安楽世界と云ふのは弥陀浄土であるところの佛国で基督の天国であるところの楽園である。

日本民族は高天原と称へまつるので、天照坐皇大御神の築きたまひて天照大御神の知ろしめします天照皇大御神の神界である。五代にして七代にして三十五代にして一代であるところの三十六神界である。

つまり善悪を明瞭に判別の付いた世界である。之れを天地初発と教へ来りしところで善は善であり、悪は悪で、美は美で、醜は醜で、正は正、邪は邪であると各人各自が知り得て行ひ得たる曉なので、一圓昭昭一音琅琅の極無極限無限の日にして、火にして一にして非にして否にして緋にして光明晃耀赫灼赫赫たる大宇大宙なのである。大宇宙の大中心としての無宇宙にして無宇宙の無中心である。

無宇宙の無中心であるから極大であつて極小であつて極大極小である。一圓相で一音響だとは示の教へたまふところで人の身としては知り得るところではない。

神言靈は之れを「アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト」と教へ給ひ、「アマテラシマシマスアメノミナカヌシノカミ」とも「アマテラシマシマスアメオホミカミアマテラススメオホミカミアマテラスオホミカミ」とも「クニトコタチノミコト」とも「トヲカミエミタメ」とも「アアヒガテンジンユウアイコウ」とも「アチメ」とも「アマミダ」とも「ナムアマミダブウ」とも教へ給へるところである。

此のような神言靈を平常不斷に称へて居れば、一圓一音の示界が平常不斷に築成されつつあるのであるから、此の身は小さく狭く限られて居るようではあるが、小さく狭い其のままに広く大きな示界が現れて来るのである。

阿弥陀如来の浄土は西方に在ると云ふ。西又西で際涯無く西へ行くのだと云ふ。際限の無い西と云ふのは西であつて東で、東であつて西で、南であつて北で、北であつて南で、上であつて下で、下であつて上で、中央であつて十方で、十方であつて中央である。

故に西でもなければ東でもない、南でもなければ北でもない中央でもなければ上下でもないところの大宇大宙で、大宇宙の大中心である。従つて十方世界で十萬億土で東西南北上下中外である。之れを十字架となすので白玉で皇で天皇で日本で神籬で統一魂神である。

地蔵佛界(七)

その速なることは蓋「ナムアミダブツ」一語の称名に一切衆生の罪障が消滅するものと等しきものである。然うしてそれは、

「天津祝詞乃太祝詞事乎宣」る結果である。

如此結果を齎す「天津祝詞乃太祝祠事」とは抑何であるか。それを形象であらはせば、

「本打切末打断千座置座爾置足波志」たる「天津金木」であり「本刈断末刈切八針爾取辟」たる「天津菅曾」である。

仏徒に云はせるならば金胎西部乃至仏界の実相たる曼陀羅でもあり詞としてならば「南無阿弥陀仏」の六字の名号でもあり真言でもある。なほ太古中央亜細亞に起り現在も基督教徒の行ずる十字架もその一つの神象である。

がさて奈何なればそれが垢穢を掃ひ浄土を築き苦悩を去り楽土と成すのか。それは既に前に述べた如く「零境」に徹するからである。「零」とは「無」である。「無」なるものが「有る」のである。之を別の詞では「極」と呼ぶ。一切を脱却するもので脱却したるもので人間身の認め得るものを仮借しては「火」である。地獄の火で餓鬼道の火で畜生の火で修羅道の火で三千大千世界焚尽の火である。

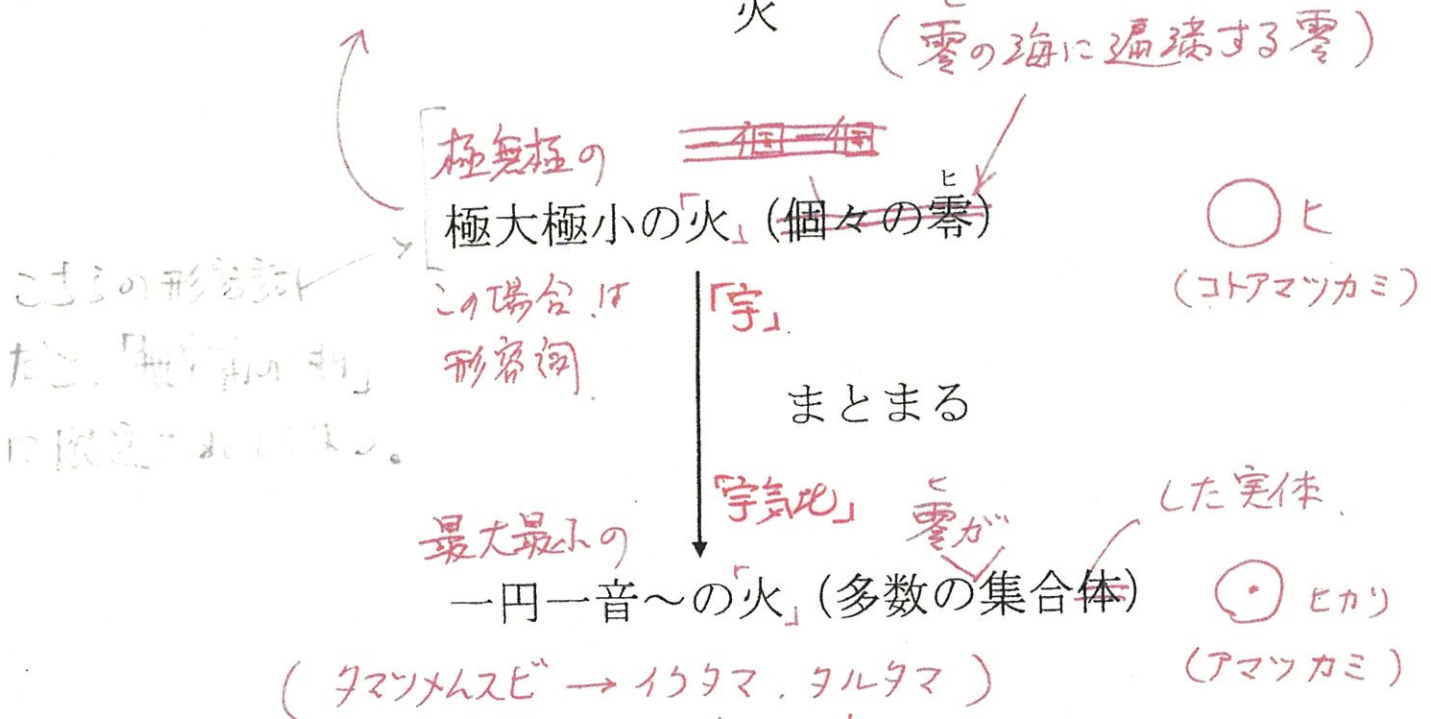
此の「火」を忘れざる人は「畏れ無く」此の「火」を畏るる国は「憂ひ無し」。此の「火」を掲げて一切衆生を靖寧和平ならしむるは畏くも日本天皇の神伝にして「大被」の秘儀なりと拝承しまつるのである。

ヒフミヨイムナヤコト
一二三四五六七八九十と神楽歌神の御垣の手火ぞ畏き。

嗚呼是レ神の御恵みなり皇スメラガムツ 親神漏岐神漏美の命オホセなり。

阿知米。

これが大宇宙全体に遍在している状況を ← 無宇宙と宇宙の双方を指す。
形容して、「尽天尽地の火」と言う。



こちらの形も多
た「地」の形
に限定されている。

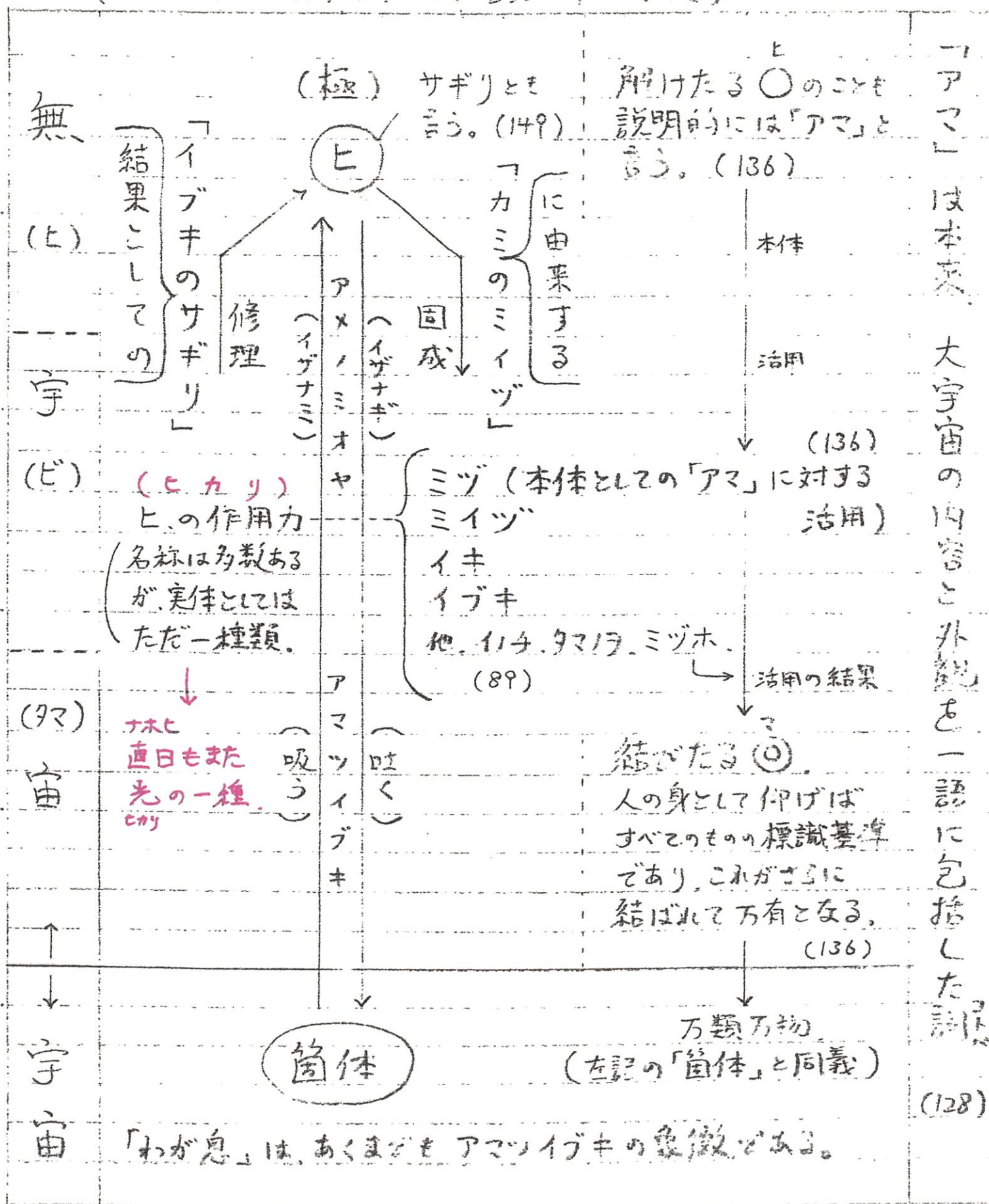
(タマツメムスビ → イクタマ、タルタマ)

合体して、タマトタルタマになる前の段階

この火が、顕幽表裏に常立った状態をミコトと称し、
その一方に立った状態をカミ (アマツカミ又はクニツカミ) と称する。

- ミコト、形を解いた実在、故に顕界にも幽界にも出入り自由、燃える。
- カミ、形を成した実体、故に顕幽の一方にのみ所属、結ぶ。

(カッコ内の数字は、すべて言葉の章の页数)



2018.11.20.提出分.

幸14頁について、

幸12頁末行から読み返すと解りますが、「陰陽不測」と

「神魔同凡」は別の話です。(ビの段階とタの段階)

『^(ヒ)「零」(実体)の活用は「ミヅ」であり、この「ミヅ」は、

水とも火とも氷火とも火水とも書くことができる。(12末～13初)

その意味において、この「ミヅ」それ自体は^(ビ)陰陽不測の存在

であり、その「同じミヅ」が^タ経(火、陽)と^ヌ緯(水、陰)という

「二つの役割」に分かれた上で、また一つに合わせることによって

新たな簡体が築かれる。(実際には、まだタの段階)

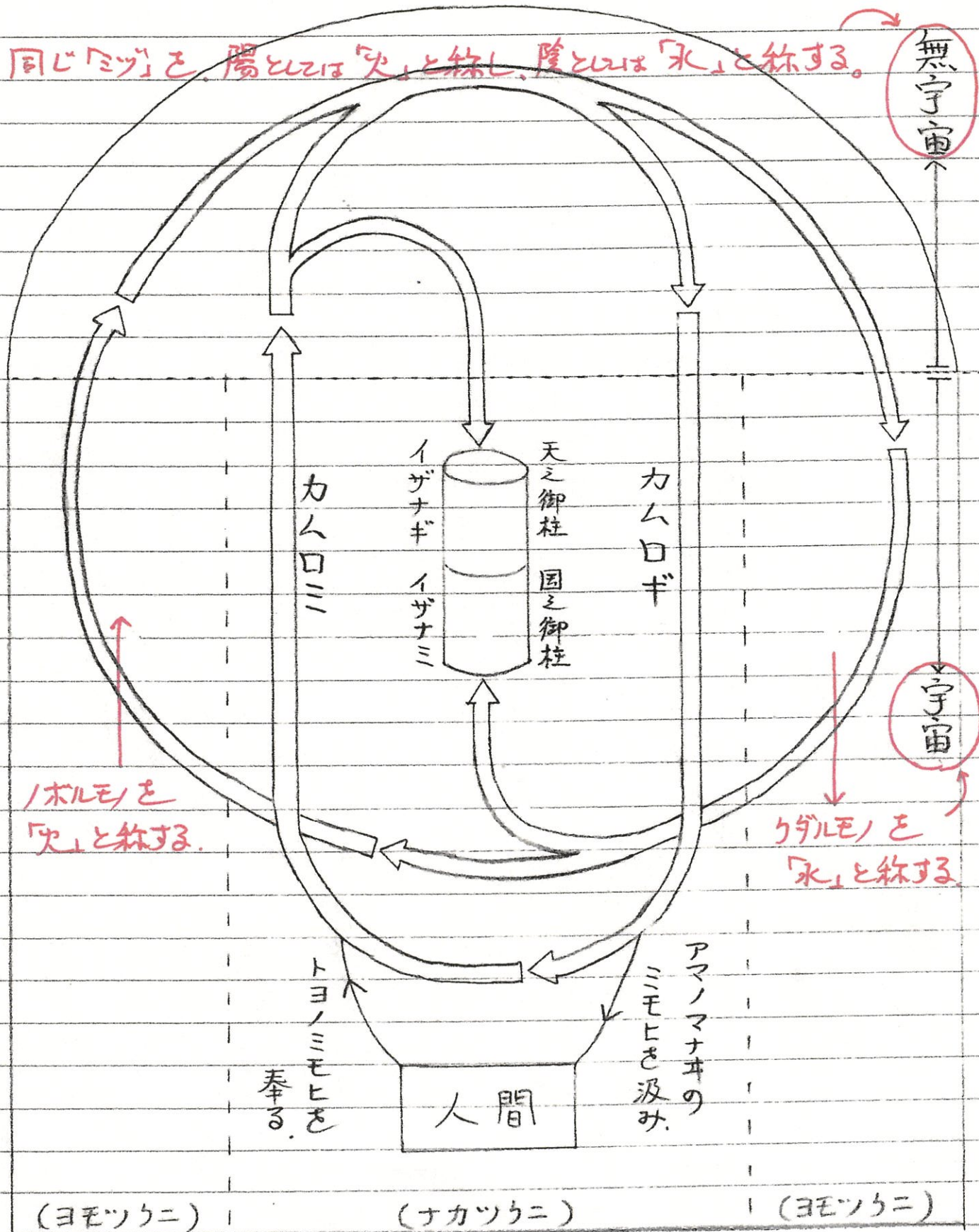
^(タ)その簡体もまた、人間の視点からは神とも魔とも判別の
つかない存在であり、それらが同凡にあるので、無宇宙は

神魔同凡と表現されるのである。』

と書かれているのです。

(次頁の図表「陰陽不測と神魔同凡」を参照)

ミイツ 循環図



(幸.136)

ミンスビノカミ

次に三産靈神

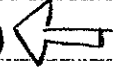
無宇宙

ミヅ、経タてとしては綾威
緯ヨとして水ミヅが
場所

(地)

ノ
ボル
モ
ノウ
ダル
モ
ノ

(水)

(地^へのミヅ)
から(天^へのミヅ)
から

あくまで

旧約聖書の用語

宇宙

ミヅ は コトマ であり、靈的な実体の名称だが、

ここで言う「火」や「水」はただの呼称である。

ノボルモノ …… 「本質的に昇り統けモノ」という意味ではなく、

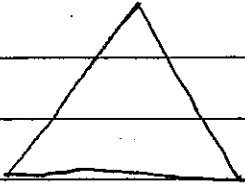
循環するミヅの^上昇局面を指して、

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ …… 上記と同様。

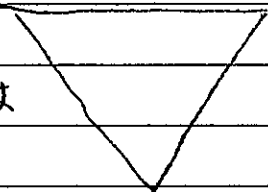
2019.5.28.(火)

ヒは



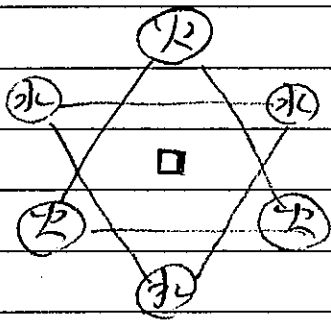
ノボルモ/ であり。

ミヅは



ウダルモ/ であり。

①



これもまた、中心と外郭を表す。

平面上なので六芒星形にしているが、

意味内容は  と同じ。

真柱は イへのアルジとしての一点である。

ミヅとミヅに代わっているのは、^ミ酒は^イ数理としては五なので、

「これから上昇すべき」という点を強調したのか？

→ あとは、「火」で無宇宙を表現し、

（「水」ではなく）「酒」で宇宙（筒体）を表現している

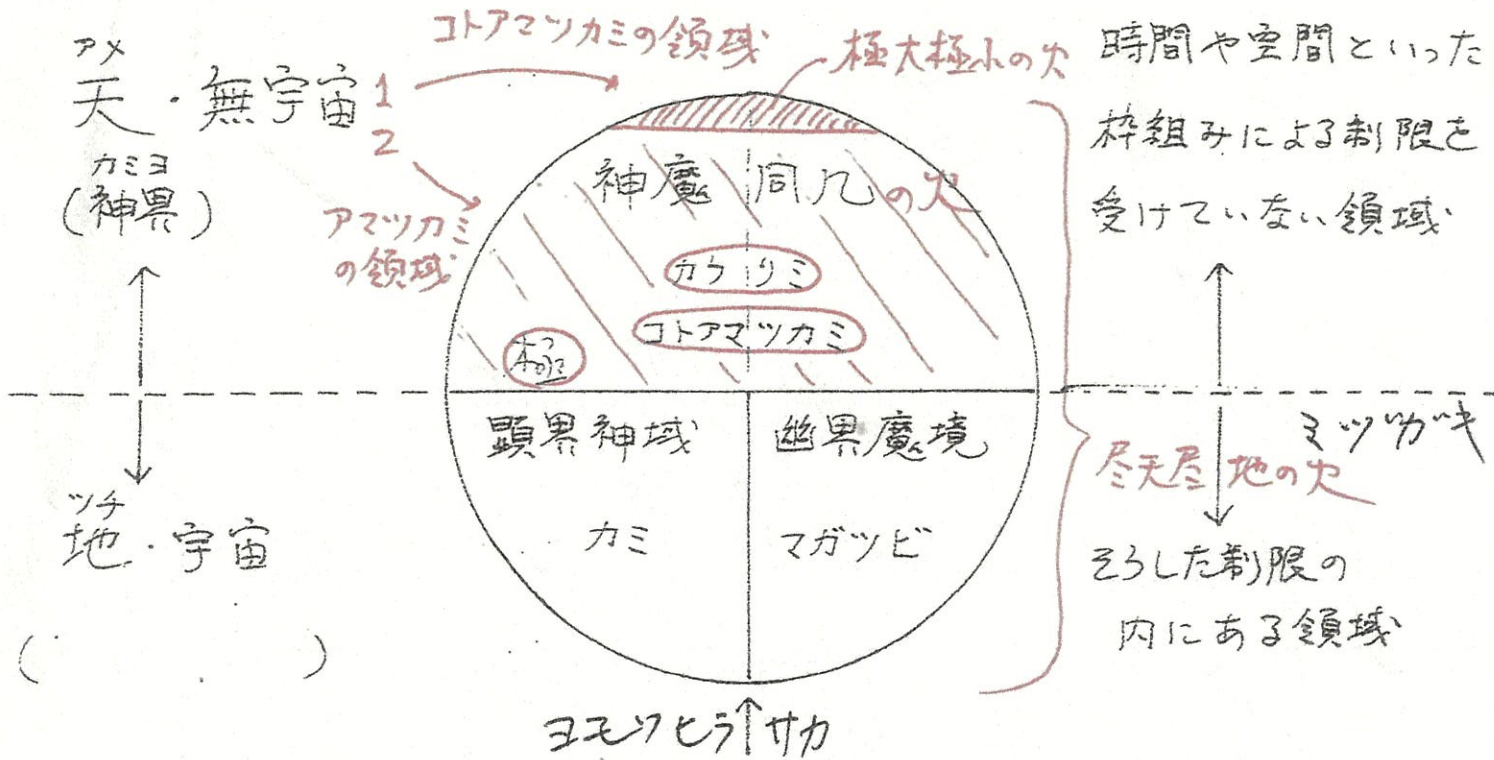
ものと考えなければならぬ。

（^{ミヅ}人間の身魂は、宇宙の側^{ミヅ}に経緯のある筒体として存在しているので、
数理としては「五」である。）

アノケ

天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。



この二項対立の図式は、^{ツチ}地の側でのみ有効。

^{アメ}天の側には及ばない。

アメ

天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域。

“ 物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域。

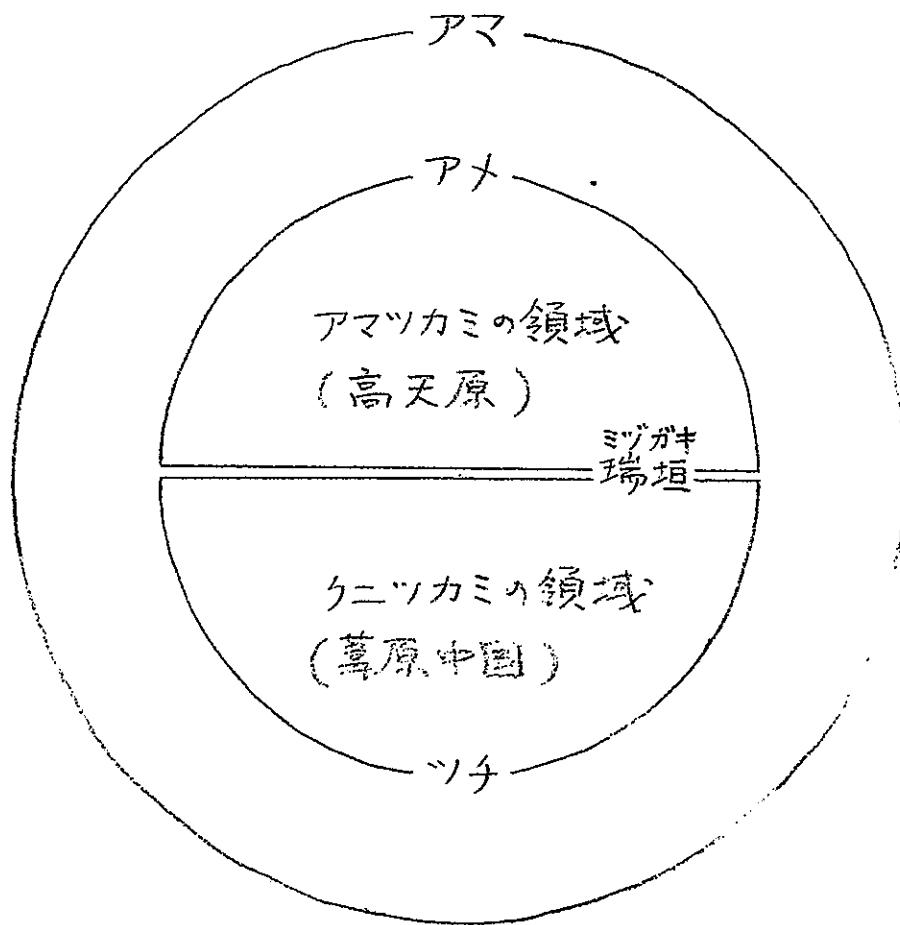
{

 コトアマツカミの領域 (無宇宙) --- (天石屋)^{アマノイハラ}

 アマツカミの領域 (無宇宙) ---- 天アメ

 クニツカミの領域 (宇宙) ----- 地ツチ

 } 全部あわせて「アマ」



- 「^{タカマノハラ}高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。
- 現実には「クニツカミの領域」は 顕界神域 (カミの領域、^{ナカツクニ}狭義の中津国) と 幽界魔境 (マガツビの領域、^{ヨモツクニ}黄泉国) とに分かれている。(第一版を参照)

「ヒ」の存在様式の三段階、まとめ

() 内は「言霊の幸」の頁数、< > 内は「修禊講義録」の頁数

1 「ヒ」の「零」の海に充滿する「ヒ」の「零」そのもの。○

{ 純一不可分の「ヒ」の「零」(90) . 純一不可分の「ヒ」の「零」<80> .
ミムスヒ イムスヒ タムスヒ タマフタムスヒ
三産靈 (生産靈 足産靈 玉積産靈)
ミ ミタマ
実としての御靈 (以上、130)

これが ↓ ムスビムスビ
産靈産魂て

2 ○と○との複合体。◎ (136) . ② (68) . ③ (72)

{ タマノヲ、ミヅノホ、イノヲ、千変万化する「ヒ」の「魂」の活用 (89)
タテ スキ ラ メ メ
経と緯 男と女 凸と凹と (91) . タカミムスビとカミミムスビ (68)
ミムスビ イムスビ タムスビ タマフタムスビ
三産魂 (生産魂 足魂 玉留魂)
ミ ミタマ
身としての御魂 (以上、130) . 三不可分の「ヒ」の「魂」<80>

その種子が ↓ 芽を出すと <84>

3 合体としての成立。④ (36) . ⑤ (78.末)

{ タテ スキ
経と緯との相交わりたるもの (91)
ミ イタマ タムタマ タマフタムタマ
不-不二不三の玉 (生玉 足玉 玉留玉) <80>
人間身の上では 根本魂 直日 (ナホヒ) <132>

發展して御中主太神に還元す。故に主觀客觀俱に出發點あり歸入點あり、出發歸入不二一體となり居るのが祖神の垂示である。この中心分派根本末梢出發歸入發展還元、不二一體を綜合したるものが天御中主太神に在坐すものである。

とは超絶的(四)本體神と本體の本體神と大本體神と總體と一と稱す。

且つその宇宙萬有の出發活動歸入する状態は、客觀的に説明すれば、光である、稜威である。主觀的に説明すれば、その光りや稜威の主觀が生産靈神、足産靈神、玉留産靈神である。その生産靈、足産靈、玉留産靈の統一結晶體が高皇産靈神、神皇産靈神である。それで高皇産靈神、神皇産靈神は生

産靈神、足産靈神、玉留産靈神の三神より成立し居ると共に、生産靈神、足産靈神、玉留産靈神は天御中主太神より分泌分出し居るのである。故に高皇産靈神、神産靈神は宇宙萬有の本體にして、生産

靈神、足産靈神、玉留産靈神は宇宙萬有の本體の本體神であると共に、御中主太神は宇宙萬有の本體の本體の大本體神となり居るものである。

(四五)天御中主太神と三産靈神と高皇産靈神と神皇産靈神

天御中主太神

未来324頁より

緯対 — 神界^{カミヨ} (空間) } 神代
経対 — 神代^{カミヨ} (時間)

この「界」と「代」は当て字。

大切なのは、「カミヨ」というコトヲマ。(無宇宙)

「^{カミヨ}神代^{カミ}の神」は、「無宇宙の^{ヒノカミ}零の神」の意味。

同頁. 3行目. ^{意訳} (人間が無宇宙のヒノカミと同じ
境地に立ったら. その時には、)

「各自各自が^ヒ◎と成り立つ時. 〜」

以下は. その境地を表現した文。

秘稿「祖神と主神」に即して言えは、

^{ヒノカミ}◎としての. 神代五代の境地である。

→ 途中は文学的表現で、

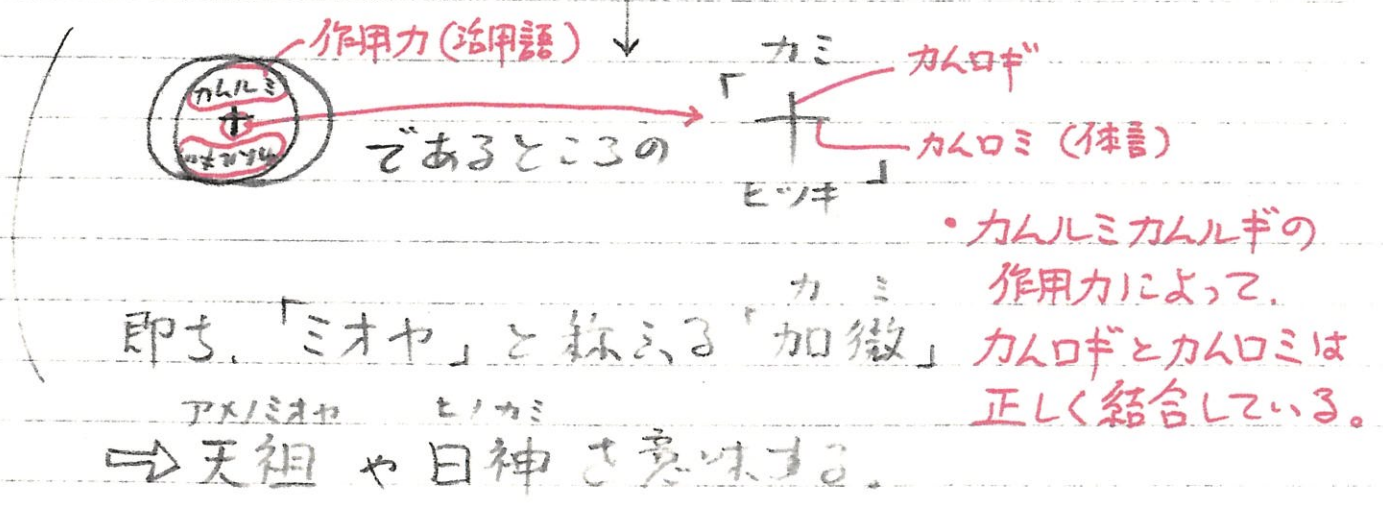
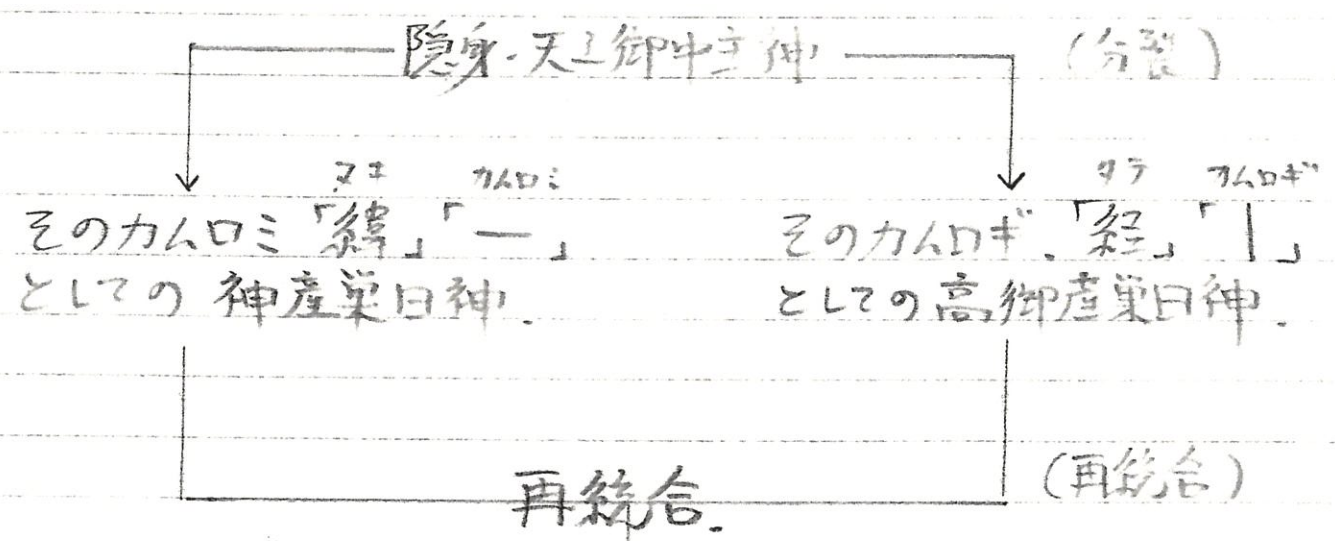
実際の述語は. 末尾の「^{カミ}十で. (其に) ^ヒ一である」である。

(2020.10.20. 追記)

未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230

『その「^{カミ}十」と結び結ぶ（元としての）^{ヒノカミ}隠身』



典型的には（ヒノカミとしての）天照大御神

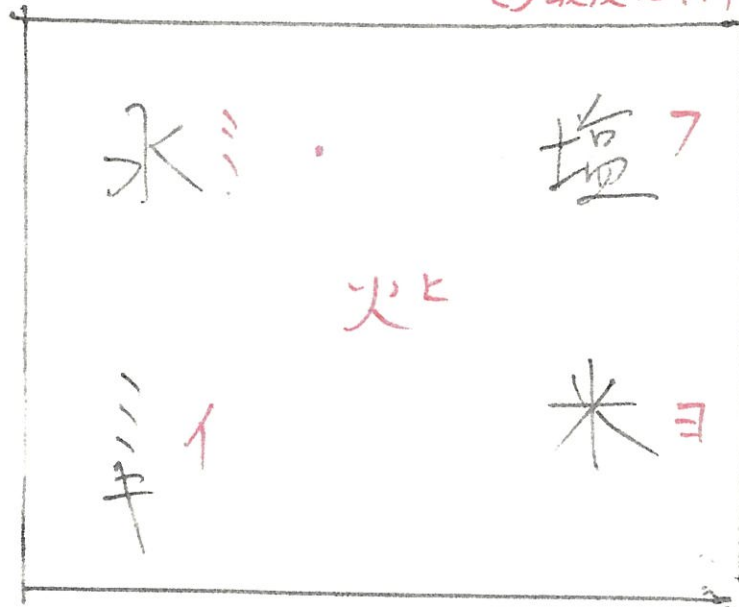
→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タテノカミ→ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

家庭用

神から見て「左上右下」なので、

- ① まず中心(もしくは別枠)に火と。
- ② 次に、神から見て近い側に、
左に塩、右に水ミ。
- ③ 最後に、神から見て遠い側に



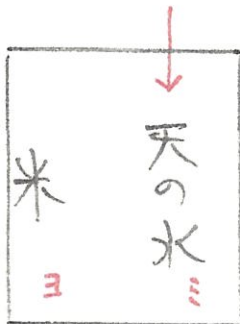
左に米ヨ
右に酒イの
川貞と交る。

神
前
供
物
設
定

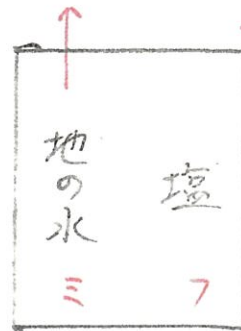
三室の場合

火ヒ

カミムスヒと同様。
下へ行く力。



タカミムスヒと同様。
上へ行く力。



水ミ が二つに分かれているが、これを考え方は
上に同じ。神から見て「左上右下」。
最後にイ. を中央に置いている。

① 宇宙の神言霊 によって、

「無宇宙の火」を認識する。

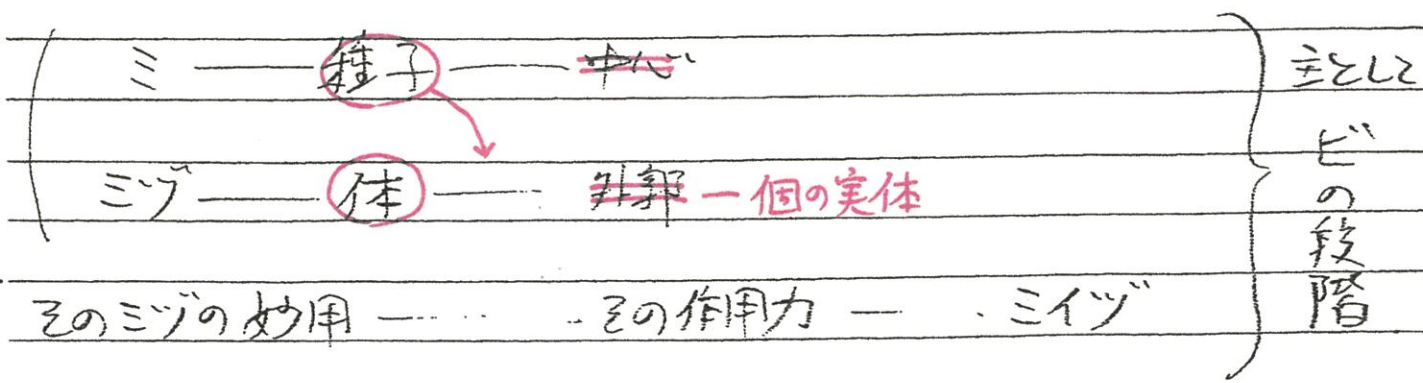
② 次に、これが宇宙の中へ降りて来たと観念すること。

ロウソクの火と「一つ火」とする。

③ この「一つ火」によって、故人のミタマを判断する。

↑
神話に^{かむ}神習い

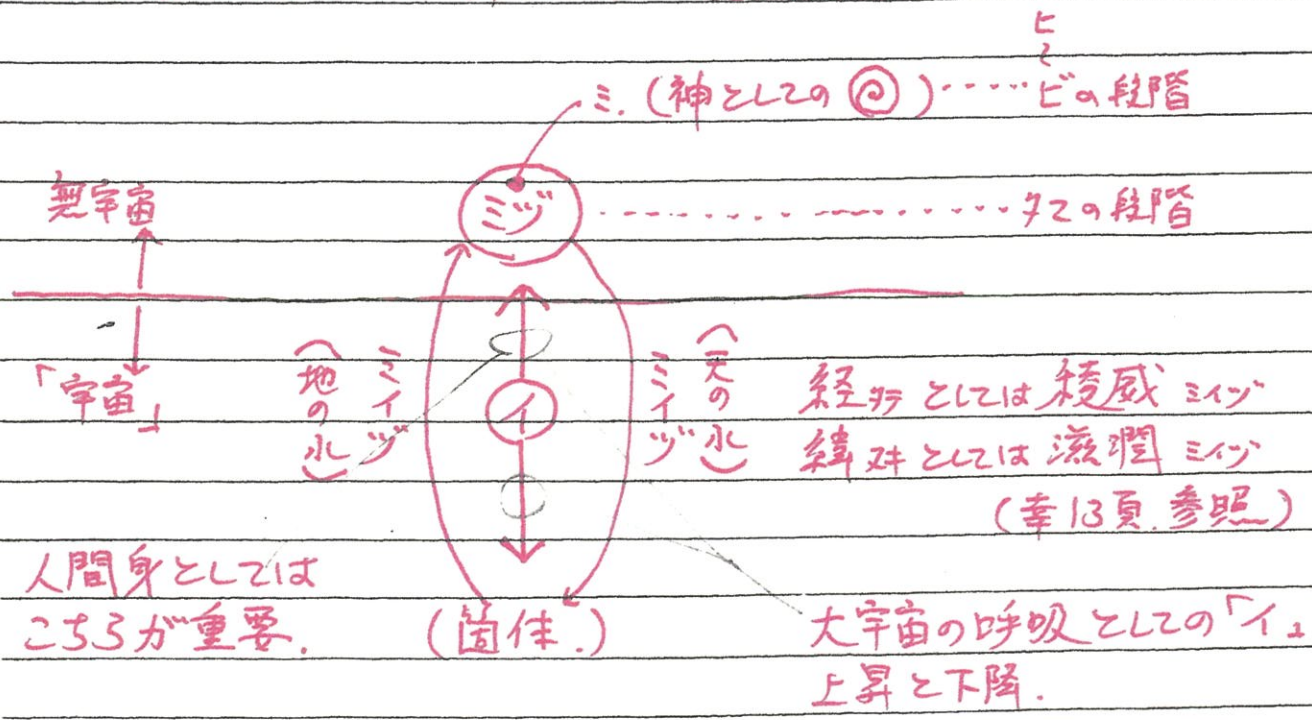
録96.



録98頁の文から考えて、上記のミとミヅは、
もはや ミの段階にある実在であるものと思われる。

録96で言う ミヅは無宇宙の実在を表す。

「イ」は大宇宙の呼吸なので、その一音を加えた ミイツは
大宇宙を循環する 神のミイツの意味となる。



2020.4.7.提出

「ヒ」と「ミヅ」

多田流では「△ノボルモノ」と「ヒ」と呼び、また、「▽ウダルモノ」と「ミヅ」と呼んでいるが、これらは無論、コトワマであって、決して物理次元における^{ファイアー}火や^{ウォーター}水と直接に指し示している言葉ではない。

物理次元の^{ファイアー}火や^{ウォーター}水は、あくまでも「ヒ」や「ミヅ」の象徴である。^{ファイアー}火は上へ向かって燃え上がるものだから、

「△ノボルモノ」の象徴となり、「ヒ」と呼ばれるようになった。

^{ウォーター}水もまた、しばしば^{あめ}天から^{あめ}雨として降って来るものなので、

「▽ウダルモノ」の象徴となり、そのまま「ミヅ」と呼ばれるようになった。ただそれだけのことである。

幸12~13頁にも、『その「ミヅ」とは、現今の文字で、

水とも、火とも、水火とも、火水とも書き得る』とある

とおり、「△ヒ」も「▽ミヅ」も、合わせて「ミヅ」なのである。

コタマとしての「ミヅ」は、本来「^ヒ零の作用」を意味しており、「ヒカリ」や「イキ」や「イノチ」とほぼ同義である。

幸13頁11～14行目にも、『^ヒフミで「ミヅ」と呼ぶのである。

火^{ミヅ}水であり、水^{ヒカリ}火であり、(中略)水であると共に、神の光^{ヒカリ}でもあり、火の輪^ヒでもあり、神輪^{カミフ}で(後略)』と書かれているとおりのことである。

(ここから察するに、「フ」というコタマ それ自体に、「作用力」の意味合いが含まれているのであろう。)

通常は、「ヒ」は実体としての「^ヒ零」を表わすことが多く、その作用力は「ヒカリ」と呼んで区別することが多いのだが、「ヒとミヅ」と対^ツにして言う場合の「ヒ」は、しばしば「ヒの作用力」の意味となるので、注意されたい。

こうした作用力は、実際には「途切れることのない、一塊^{ひとがたまり}
^{はたふき}の作用力」なのだが、これをあえて「上昇の局面」と「下降
 の局面」とに分けて考え、それぞれに名を付けるならば、
 「△ノボルモノ」は「^ち地のミヅ（^{ツチ}地の側から今しも昇りつつある
 ところのミヅ）」となり、「▽^{てん}ウダルモノ」は「^{アメ}天のミヅ（^{アメ}天の
 側から今しも降りつつあるところのミヅ）」となる。

一方、より一般的には「△」は「^ヒ火」と呼ばれ、「▽」は
^{ミヅ}「水」と呼ばれるのだが、^{。。。。}結果として、「^ち地のミヅ」とは、
 『^ヒ火と^{ミヅ}水』という形で対にして言う場合の「^ヒ火』』と同義に
 なるのである。

ウダルモノ

▽としてのミヅ

合わせて、

— 広義のミヅ —

ウダルモノ

▽としては 天のミヅ

ノボルモノ

△としてのヒ

ノボルモノ

△としては 地のミヅ

また、広義のミヅがミヅとして無宇宙と宇宙との間を循環
する時、下降の局面においては、もっぱら^{カタメナス}固成^{おこ}が行なわれ、
上昇の局面においては、もっぱら^{スリ}修理が行なわれる。
故に、この循環全体を表現して、幸205頁のノリトのように、
『^{わか}別れ^あつ^と合^とひ^{ます}つ。解^やけ^{かへ}つ結^{かへ}び^{かへ}つ。往^{かへ}き^{かへ}つ返^{かへ}り^{かへ}つ』という
のである。

また、考えようによっては、「▽^{クダルモノ}ミヅ、天のミヅ」とは
「イザナギ、^{アメ}天の御柱^{ミハシラ}（固成の作用）」であり、「△^{ノボルモノ}ミヅ、
地のミヅ」とは「イザナミ、^{クニ}地の御柱^{ミハシラ}（修理の作用）」である。
幸250頁のノリトは、今回の話題とは直接には関連が無い
が、上記の一点において、間接的にはつながりのある話と
言って良いだろう。

2020.4.7.「ヒ」と「ミヅ」の続き

また、幸15頁の14～15行目には『^{アマノマナヅノミヅヒ}天真名井水 ^{ミヅ}とは天上の水で、
^{トヨノミヅヒ}豊水 ^{ミヅ}とは地上の水で』とある。

即ち、人間は、^{アマノマナヅノミヅヒ}天真名井の水を汲み、また（^{モセン}素饗として）

^{トヨノミヅヒ}豊水を奉^{たま}ることによって、象徴的に、この「^{ミヅカミ}無宇宙と宇宙との
間を循環する、巨大なミイヅの流れ」の中に、自身を置く
ことができるのである。

（実際には、万類万物は最初から、こうした「^{ミヅ}流れ」の内に
あ
在るのだが、それを深く自覚し、主体的にその「流れ」の中に
参入するためには、こうした儀式的所作が必要となるので
ある。また、^{モセン}素饗そのものは象徴なので、当然に縁とおりの
意味が込められている。これを矛盾と考える必要は無い。）

この「^{おお}流れ」をごく大まかに図示したのが、7頁の図表で
ある。

この「流れ」は、実際には、あくまでも「途切れることのない、
^{ひとがたまり}一塊^{はたらし}の作用力」なのだが、人間の目には、「下降の局面」
(天のミヅ、▽ウダルモ、カムロギ)と「上昇の局面」(地のミヅ、
△ノボルモ、カムロミ)とに分かれているかのように見える。

また、7頁の図表では、人間が直接に参入することのできる
「ナカツウニの側での循環」と、生きている人間には無縁の
「ヨモツウニの側での循環」とを、分けて表記したが、
これもまた、単なる「理解のための便宜」^{べんぎ}に過ぎない。

実際には、もっと複雑に絡み合^かって、「どこかで切り分ける」
ということの全くできない「一塊^{ひとがたまり}の流れ」になっている
ものと思われる。

ミイツ 循環図

同じ「ミツ」と、陽としては「火」と称し、陰としては「水」と称する。

無宇宙

宇宙

ホルモノを
「火」と称する。

ケルモノを
「水」と称する。

素戔
のこし

トヨノミモヒを
奉る。

この循環に上り
降りるの作法

人間

アマノマナサの
ミモヒを汲み。

(ヨモツクニ)

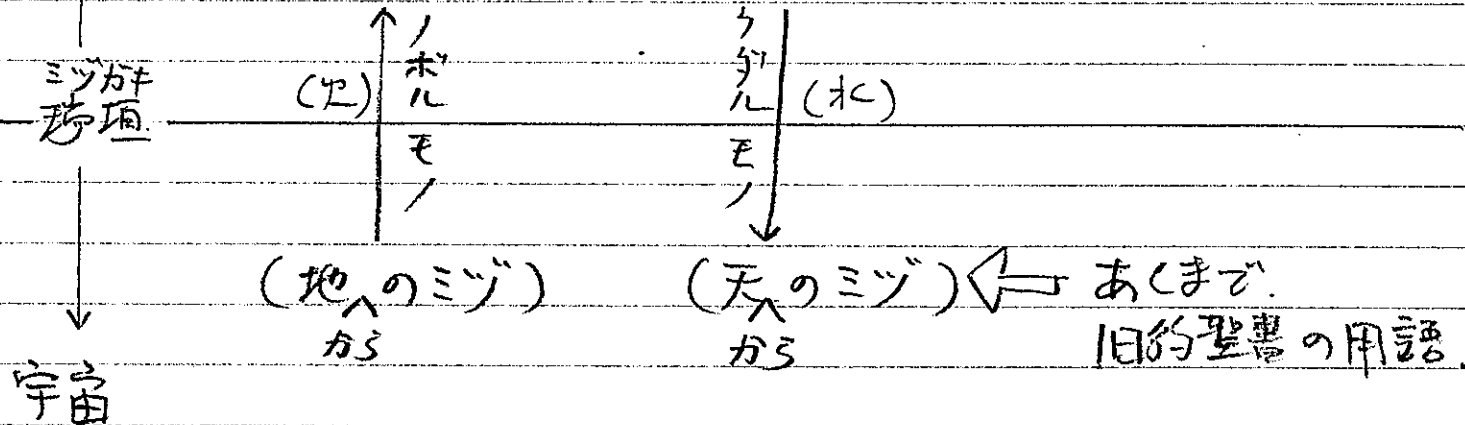
(ナカツクニ)

(ヨモツクニ)

(幸.136)

ミンスビノカミ

無宇宙 ミヅ、経テとしては綾威 } 共に三産霊神
 緯ヨとしては水



ミヅ はコトマ であり、霊的な実体の名称だが、
 ここで言う「火」や「水」はただの呼称である。

ノボルモノ 「本質的に昇り続けるモノ」という意味ではなく、

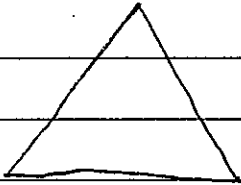
循環するミヅの^あ上^あ昇局面を指して、

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ 上記と同様

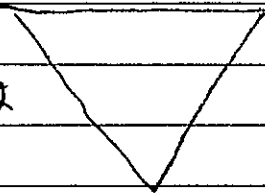
2019.5.28.(火)

ヒは



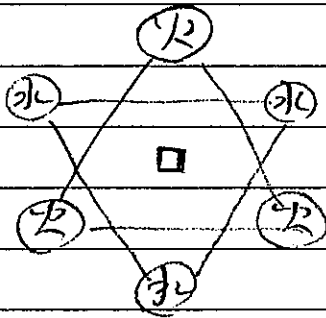
ノボルモ/ であり。

ミヅは



ウゲルモ/ であり。

①



これもまた、中心と外郭を表す。

平面上なので六芒星形にしているが、

意味内容は  と同じ。

真柱は イへのアルジとしての一点である。

ミヅ を ミキ に代えているのは、^{ミキ}酒は数理としては^イ五なので、

「これから上昇すべき」という点を強調したのか？

→ あとは、「火」で無宇宙を表現し、

（「水」ではなく）「酒」で宇宙（筒体）を表現している

ものと考えざるべきかも知れない。

（人間の^{ミキ}身魂は、宇宙の側に^{ミキ}経緯のある筒体と存在しているので、
数理としては「五」である。）

一 拜神瞑目して光を認むるは神命にして、其の位置と数と明と暗と滅と色彩と形状等とは、直に其の説明を與へたまへるものなり。

①座を回りて多数の一あるを認めたるものは、赫々の火にして聖無動尊の加護顯著なるを示し、②高く一点の火を拜するものは、光明世界に住することを

教へ、③日ならざる一箇の火は八握劍にして、④全身零に坐する時は白玉身を悟證し得たる暁なり。

アアヒガテンジンユウアイコウとは称へまつるなり。

奉教することが

必要である。

アチメアチメオオオオオオオオオオオオ

アチメオオオオオ

アチメアウヲ

アアヒガテカジンユウアイコ

ウ

ウトノミヤシロ

ウトノカミミヤ

ウトノミヤ

ウト

ウ

ア

ハ

ヒ

フ

ク

フルベユラユラトヲフルベ

ユツツマグシ

ウ

ヤシマジヌミ

イウヲ

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウ

ウ。ク。ヒ

アチメ

ヨシ

ヒフハ

心して我は行かなん朝夕に

神の心を心とはして

置く露を掃ひては行け朝毎に

道の長途の長き旅路ぞ

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ

フハヒフヘホ

一四七言、リト

と称す

秘儀の説明

状況

→

その意味内容

拝神瞑目して光を認める。

何らかの神命である。

① 座を^{めぐ}回りて多数の^ヒ一が
あるように見える時は、

聖無動尊の加護が顕著
であることを示している。

② 高く一定の光を拝している
ように見える時は

(その人の意識が、今すでに)
光明世界にあることを教えている。

③ 日なる^ヒ一閃の^ヒ火が
見える時は、

入握剣の作用力が
(今ここに来ていることを示し)

④ 全身が^ヒ零の中に座している
ように感じる時は、

白玉身(直日)と悟證した
暁であることを示している。

おおよく、順序は^低①→②→③→^高④の順であり、

この④直日の悟證^{ナヒ}に至るためのコトワガ、十四字秘言である。

同じ十四字をさらに唱え続けることで、

^{ナヒ}直日の作用力は^{はたし}全身魂^{ミタ}に行き渡り、

その人は「この身このまま神と化^なる」のである。

を指しては、「火人」の義であり、男女の合体たる上からは、「人」の義で、すべて四義が有る。

此の名称の教ふる如く、人間身は、何如にも怪奇異霊の神魔殿とも呼ぶべきである。此のやうな人間身と等しく、神魔雜糅神魔交錯の混合体で、一日一時と雖も、崩壊流失散乱亡滅しないのが不思議な程だからとて、「國家」をば「クニ」と呼ぶ。その「ク」は「クシビ」で、怪奇異霊の義であり、その「ニ」は「ニギビ」で、調和統一したるものとの義である。故に、「クニ」とは、何如にも不思議なる群聚魂・群我（国土山川草木人畜等）が、好くもマア、調和を保ち統一して居るワイ、と驚嘆讚美の意を籠めた言葉である。

是くの如き人間身が、五十、八十、百歳の寿を保ち、國家が、幾百千載と持続するのは、或は寧ろ不思議かも知れぬ。「ヒト」は此のやうな「クニ」を何のやうにして築いたか。

現在の如き國家成立以前に、「クニ」と呼ぶことはなく、「イヘ」が在っただけである。

「イヘ」の「イ」は正しくて上升する義であり、「ヘ」とは住み処で、宿で、物を産出する「トコロ」だから「胎」である。それ故に、「イヘ」とは、安息所で、發展上升すべき胎ヤドとの義である。人は此ここに休息し安養し、此こより発足し伸展する。その発足し伸展したる暁には、広き地域を必要とし、幾十百千万八百万と展開しては、之れが統治統率に複雑なる組織をも必要とするに到る。

「ヒト」が「イヘ」を立てた時には、自身を省察して、その組織構成を直に家に移し家憲を立てる。その如く、國はまた、家憲を移して國憲を立てる。そのやうな順序で、人の集團は、その大小広狭に関はらず、必や。人自体の組織構成を基準にして運営する。人間心身の組織構成は、固より宇宙の事理そのままだから、集團を成す時、此の事理に忠実ならば、その運営は、必や円滑で、健全なる箇人そのままの集團が成り立つ。

る。之れを、

人の世では「聖」と呼ぶ。則、「カミ」である、我の内に拝む神であると共に、内外不二に拝みまつる

「天皇」にてまします。

カミノイソデハハデモナシ
聖 寿 無 窮。

之れは単なる讃へ辞でも祝ひ詞でも希望の詞と云ふのみでもない。まことに宇宙の事実で真理なのである。太古以来、その聖なる人類は此の事実を明らめ得て、此の真理の上に国を建てたので、それは「神聖国祚」あつた。

その国は穢れ無ければとて「土」と書き「穢土」と區別したのは注意深き支那文字の成立である。形に書け○である。或は□とも描く。之れを日本語ではアマと呼ぶ。空なのである。「天」であり、「海」であり、「女」である。

「ア」は発ぎ発いて、果て無く限りの無いのであり、「マ」は円満具足であるから、「アマ」とは大宇宙の義で都べてのものの産出者で、祖である。則、母胎で空界で零境である。之れを「イへ」と呼ぶ。

此の○には不断起滅の火が有る。その火の燃ゆるを見て、○の中に一点を点ず。則、○である。「いへのあじ」で「光」である。「不断起滅の火」であるから即「一点不滅の火」である。

一点不滅の火は、則、無尽無量の水で、それがそのまま無際無涯の身であり、身も無く境地も無い心であるそれは身でもなく水でもなく火でもなく心でもないところの○であるからとて、古老は、

一二三四五六七八九十と称へて、円満具足の箇躰だと讃美したのである。



末
197

の御名を稱へまつれ。觀世音の御名を稱へまつるならば、皆俱に、觀世音の御聲を觀て、解脫^{サト}り得るのである」とて、耳に聞けば聲で、目に見れば相^{スガク}で、人の機能相應に受け入れて、解脫^{サト}り得るのだと訓誡^{ヲシ}へ。唯一筋に、觀世音の御名を稱へまつるならば、其の聲が、人の苦惱を變へて、觀世音と化せしむるので、その曉には、普くして一つなる光であるとの義を示してをる。それは、訓誡であり、事實であり、眞理であるので、人間身として之を體現した歴史を傳へて著名な一つに、悉達多太子の悟證が有る。

太子が、苦行仙人のもとを辭して、清水に浴し、乳糜を攝り、安靜として菩提樹下に坐し、禪那微妙、東天を拜して虚空定に入る。之は是、虚空藏菩薩の妙智で、一圓光明の佛界を現じたので、此の土此のままの極樂淨土を築き成したので、寶塔湧出で、佛誕である。

それは單に、佛名を念じたばかりでなく、唱名と印相と坐位と、而^{サウ}して境地と、總べてが融會和合して一圓相を現出したので、在るかぎりが佛身である事實を證明したので、華嚴法城で、妙法蓮華座上の阿彌陀佛で、亦の御名を觀世音佛と稱へまつるは、言靈^{コトクワ}を奉稱しつつ佛國を築き成すべき方圖を教へ給ふが故である。此の言靈とは、神の御名で、佛の御聲で、惠保婆の火で、形象を傳へては、○^フで、日本の古典には、「鏡の船」と記して、佛盤であることを教へてある。少名彦命^{スクナヒコナ}の祕事^{ヒノコトタマ}で、誕生佛の傳承有る所以で、佛誕會の行事としての氷^{ミゼヒ}の祕密である。

「天のミヅと地のミヅとを分ち給ふ」と、舊約聖書の傳へ、「天真井」^{アマノマナキ}「天湍河」^{アマノヤスカハ}と、日本古典の傳へ、「三生^{サンセイ}」^{シヤウズ}と、支那人の傳へたところで、約めて云ふならば、「禊^{ミソギ}」である。

禊^{ミソギ}とは、「水灌ぐ」^{ミソグ}で、「靈注ぐ」^{ミソソ}で、「氣吹戸主神事」^{イブキドヌシノカミワザ}で「ミヅ」である。その「ミヅ」とは、現今の文字で

水とも、火とも、水火とも、火水とも書き得ると共に、活用であり、本體でもあるとの意味を表現して居る詞で、日用語としては、專、水を指し、稀には、稜威をも、瑞祥をも、滋潤をも、處女をも指し示すことがある。語義の上からは、二音一語の詞で、その「ミ」とは、三^{サン}で、身^ミで、實^ミで、稔^ミで、充塞^ミで、満足^ミで、「ヅ」とは、イデマ^{イデマ}ツイル出又出^{出又出}ので、新なる箇體と成るので、此の二音が合しては、「三生^{サンイチラシヤウズ}一」なのである。新なる經緯としての宇宙、即、箇體を形成したと云ふ程の義で、一^ヒで、二^フで、三^ミで、體^ヒで、用^フで、體用不二^{ヒフミ}で、さうして、不二^{ヒフミ}で、不二^{ヒフミ}で、一^ヒ二三^{フミ}で、體用不二^{ヒフミ}三不四^{フミ}で、それは五である。五は成數であるとは、五代^{イツコ}は神代^{カミヨ}であるとの意で、五重^{イツヘ}で、五代^{イツコ}で、五世^{イツコ}で、遷流變轉^{イツコ}しつつ、不變不易である宇宙だと云ふ程の意で、隔りたるが如くにして隔らず、別なるに似て別ならず、代りたるが如くにして代らず、遷りたるが如くにして一^ヒであり、變りたるが如くにして火^ヒであり、轉じたるが如くにして日^ヒであり、流れたるが如くにして零^ヒである。零^ヒ經身^{フミ}である。零^ヒであり、日^ヒであり、火^ヒであり、一^ヒであるところの身である。故に三^ミにして一^ヒ、一^ヒにして二^フ、二^フにして三^ミ、三^ミにして二^フ、二^フにして一^ヒ、一^ヒにして三^ミにして、二^フにして、一^ヒ二三^{フミ}で、火^ヒ經身^{フミ}で、「ミヅ」と呼ぶのである。火水であり、水火であり、既濟であり、未濟であり、泰であり、否であり、觀であり、升である。天地で、陰陽で、乾坤で、卑高で、男女で、貴賤で、雌雄で、山野で、凹凸で、我等が日常使用しつつあるところの水^{ミヅ}でもあると共に、神の光^{ミツ}でもあり、火^ヒの輪^ワでもあり、神輪^{カミワ}で、輪王^{ワギミ}で、其の活動が、經^{タテ}であれば、稜威^{ミツ}で、瑞祥^{ミツ}で、緯^{ヨコ}であれば、水^{ミヅ}で、滋潤^{ミツ}で、處女^{ミツ}で、經^{タテ}とも緯とも變化しつつ、神德を顯彰するのが「ミヅ」である。

現今では、稜威を「ミヅ」と云ふことは稀であるが、稜威玉碗^{ミツタマツキ}と云ふ場合がある。之を「ミイヅ」の「イ」が省かれたものと思ふかも知れぬ。けれども、「ミヅタマツキ」とは、聖處女の義であるから、水であるところの

火である。陰であつて、陽であつて、陰陽不測である。「陰陽不測謂之神」と、支那人の傳承した「神」とは、此の義である。此の神とは、水と云ふに等しいのである。その水と云ふ字は、水である。之は、四象で、兩儀で、太極であるとの指事で、その四象とは、 $\times$ で、 Y で、火で、 H で、象形の M から變化したので、 $\times$ として、明瞭に四象を指示したので、 品 と描くに等しいので、 田 とも、 ◇ とも等しく、之を兩分したのは、 品 であつて、 水 であつて、亦、申であつて、串でもある。申は神で、その示は申を説明したので、串は、それと反對に貫きて合せたる四象なる兩儀であるとの意である。四象を合せても兩儀なると共に、分割しても兩儀で、其の經の一線は、等しく太極を示し、又、小極をも指したのである。この場合、 二極 の火で、 $\downarrow$ 神 レ の

ざるの義である。この場合、 火 と 水 の二極も意味する。

然れども、水は自、水にして、火は自、火である。その水を陰とし、母胎として、火を仰ぎ、陽を受くる時、

萬類萬物は、繁殖化育するのである。之を、零が火を孕むと呼ぶ。神魔出没水火起伏の現象世界を脱却して、神人佛子生誕するの祕儀密言である。「天真井水」とも、「水神罔象女」とも稱へまつるので、祓禊が佛誕であり、

神人産出であることを知らるるのである。

天真名井水とか、豐水とか云ふ「ミモヒ」は、火の結ばれた身との義で、一の産靈たる三である。日の産魂たる實である、零の結びたる實である、靈の結びたる身魂であるとの意なので、「ミ」とは、身で、實で、稔で、

充塞で、「モ」は、思で、思慕で、戀愛で、偲ぶで、兩者相合するので、股であり、裳裾であり、喪である。「ヒ」は、火^ヒで、靈で、零で、一で、○で、魂である。故に、「ミモヒ」とは、稜威^{カミノミイヅ}で、天地の神輪^{カミワ}で、支那人は、水火既濟と教へたので、水であり火であり、火であり水である。陰で陽で、陽で陰で、陰陽不測であると云つたので、圖にて示せば、☵☲で、之は即、神であるとの義である。其の神を、「ミヅハノメ」と稱するので、日本紀には、水神罔象女と書いてある。罔は無であるから、象無きの女なので、純男の語に對すれば、純女と云ふに等しいので、女のかぎりである。之を☷☵と畫くので、坤道耦生で、陰陽俱生で、女ならざるの女で、處女ではないので、胎である。一切の物を産出する母胎なる女なりとの義で、美田で、淨地で、皇土で、天國で、樂園で、磐^{イハ}境^{サカ}で、高天原^{タカマノハラ}なのである。

水と火と云へば、まるで別なやうに感じ易いが、現今の人の考と、古典の傳へとは、甚しく異つて居る。ユダヤの教典には、「元始^{ハジメ}に、神^{カミ}は、天地^{アメツチ}を創造^{ツク}りたまへり。その時、地は、定まれる形無く、曠空^{ムナ}しくして、暗黒の水なりき。水ならず地ならざるの地は、神の火にして、神の靈にして、空零の○なりき」「神の言ひたまひけるは、水の中に蒼穹ありて、水と水とを分つべし。神蒼穹を造りて、蒼穹の下の水と、蒼穹の上の水とを判ちたまへり。即、斯くなりぬ」

之で、天の水と、地の水と、天と地との判別とを教へられたので、天真名井水^{アマノマナキノミヅ}とは、天上の水で、豐水^{トヨノミヅ}とは、地上の水で、水神罔象女^{ミヅノカミミヅノメ}とは、神の靈であることが知らるるのである。

ギリシヤでは、哲學の開祖と云はれて居るターレスが、水は、萬物の原質で、他の一切の物體は、悉、水の變形であると唱道したのであるが、不幸にして、神の靈である水と言ふことを明瞭にして居らぬ。爲に、後學の迷

ひを惹起す虞が多いのである。

支那人は、亦別に、坎と稱して、破壊の水を説いて居る。此の水は、龍蛇で、陰極で、暗愚で、黑蛇で、溺没で、二陰が一陽を姦するもので、人間世界の終末は、此の如くなりと訓誡したものである。

之と全全反對の水を教へたのは、印度人で、辯才天は、水の徳を以つて、智慧財寶等の一切を人天に施與し、吉祥天は、樂園を築きて、佛子を化育するに、八功德の水を以つてし、水天は、摩尼を以つて、萬類を六道の中より救出し、阿彌陀の淨土は、水精宮にして、八功德の水を湛へたりと記して居る。皆共に、水ならざるの水で、火ならざるの火で、「ミモヒ」で、釋迦再生の祕言で、西方淨土を此の世に築くべき祕儀密言であるから、「祕禊」の神傳であることを窺ひ知らるるのである。

氷が四象で、兩儀で、太極で、無極で、無で、零で、靈で、六で、六身魂であることは、一で、二で、三で、火經身で、〇で、∞で、⊙で、⊗で、火を以つて築き成したる神身で、空零を緊緊堅縛したので、空の實で、空不空で、□で、晃であるところの神火であるからである。

其の氷は、神の祕禊であり、また其の結果であることは、伊邪那美神の祕と、伊邪那岐神の禊と、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神の禊祕との教ふところである。

古典は傳へて、「天孫降臨」「神子再臨」「佛陀再生」と云ふ。が、實に之は、祕中の祕で、神と神とのみ、佛と佛とのみ、密授護持するところである。固より、筆舌にすることを許されぬのであるが、現今の學徒は、古典を讀むに、人間的私見を先として、神傳を得ることを知らず、佛語を聞くことを會せず、小智に拘泥し、我意に緊縛せられ、瓦礫と瓊玉とを剖判する大智を忘れて居るから、徒に喧喧囂囂として、人を惑はし、世を毒するの

— 200 —

